

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 松本芳夫先生年譜  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 太田, 次男(Ota Tsugio)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫   |
| Publication year | 1964  |
| Jtitle           | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.3 (1964. 3) ,p.329- 353  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 松本芳夫先生古稀記念論集  |
| Genre            |   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000003-0329">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000003-0329</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松本芳夫先生年譜

## 年譜

一八九三年(明治二六)

八月二五日、和歌山県東牟婁郡下里村大字下里(現在は那智勝浦町下里二九一〇番地に、父松本鉄蔵、母ふくの二男として生る。

一九〇〇年(明治三三)

七歳

四月、下里小学校に入学。

一九〇七年(明治四〇)

一四歳

三月、下里小学校高等三年修了。 四月、和歌山県立新宮中学校に入学。

一九一〇年(明治四三)

一七歳

一二月、病気のため、同校退学。この頃より俳句に興味をもち、俳号を南国天と号して、はじめて博文館の「中学世界」(同年、五、八号)に投稿し入賞す。

この年、慶応義塾大学部文学科史学創設。主任は田中萃一郎。

一九一一年(明治四四)

一八歳

荻原井泉水主宰の「層雲」(この年創刊)に投稿す。(翌年一月号にはじめて掲載され、以後数回に及ぶ)

一九一二年(明治四五)

一九歳

三月、上京。私立郁文館中学校第四学年に編入学。当時の国語教師川出麻須美の指導により、俳句より和歌に転じ、作歌をはじめむ。また絵画にも興味を抱き、岡田三郎助の本郷洋画研究所に通い、デッサンを習う。

この年八月、乃木大将殉死。「中学世界」(二五―六)の懸賞文(課題「乃木大将に就きて感ずる所を述ぶ」)に応じ、入選。

はなれ行く人々(八月、「下里同窓会会報」一三) 九月のある日(一〇月、「みづゑ」九二)

一九一四年(大正三)

二二歳

三月、郁文館中学校卒業。 九月、慶応義塾大学部予科(史学)に入学。「本科(文学科史学)に於ては、田中萃一郎(西洋史、東洋史、史学研究法、政治学)、川合貞一(心理学、民族心理学)、幸田成友(日本史)、伊木寿一(古文书学、日本史)、橋本増吉(東洋史)、加藤繁(東洋史)、占部百太郎(西洋史)、阿部秀助(西洋史)、船田三郎(歴史哲学)をはじめ、林毅陸(近世欧米外交史)、福田徳三(日本経済史)、小林澄兄(教育史)より受講し、また必修として、神戸弥作(国)、国府犀東(漢)、畑功、野口米次郎、プレフェーア、戸川秋骨(英)、向軍治、川合貞一(独)、稻垣末松(教授法)等より受講」

《論評・隨筆》田舎の少年（九月、「下里同窓会会報」一四）

《その他》俳句（前年一二月、「人生と表現」五一—一〇。四月、「人生と表現」六一—四）

一九一五年（大正四）

二二歳

《論評・資料》田かきと椿の葉煙草（一〇月、「日本及日本人」六六五、『熊野民俗記』所収）

一九一八年（大正七）

二五歳

《論評》論議二篇（五月、「南加熊野愛友会会報」五）

一九一九年（大正八）

二六歳

三月、慶応義塾大学卒業。卒業論文は「神代史研究序説」。津田左右吉『神代史の新しい研究』に刺戟を受け、主として民族心理学の立場からこれを批判しつつ、論述す。（この論文に関する、津田博士との往復書簡については「津田左右吉博士をしのぶ」新文明一二—一一、一九六二、参照）

四月、慶応義塾商工学校教員に就任。

この年のはじめ、始めて短歌を雑誌「日本及び日本人」に投稿す。（三月、七五二号。四月、七五三号。同、七五五号）

《論文》商鞅の軍国主義（八、九月、「三田評論」二六五、二六六）

《翻訳》少数派の勢力（Vanderlip; What happened to Europe? の一章）（十一月、「三田評論」二六八）

一九二〇年(大正九)

二七歳

この年、移川子之蔵、小沢愛園、松本信広と共に地人会を起す。「(地人会趣旨)」は「三田評論」二八二号、大正一〇年一月号所載)

《著書》神代史研究(四月、三田史学叢書第一、東京・国文堂書店刊。四六判、一九八頁。卒業論文に若干の修補訂正を加えたるもの)

《論文》ロシアの知識階級の地位(五月、「三田評論」二七四) 情熱の民族(八月、「三田評論」二七七)

《翻訳》資本家の覚醒(ヴァンダリップ、前掲書のうちの一章)(二月、「三田学会雑誌」一四―二)

一九二一年(大正一〇)

二八歳

この年、田中萃一郎指導の下に、松本信広、飯田忠純と共に三田史学会機関誌「史学」の発刊を企画す。(第一卷第一号の創刊は同年一月)

《論文》古代日本人の民族的観念(十一月、「史学」一一一、「古代日本人の思想」所収)

《翻訳》ワルト・ホイットマン(トレント及びアースキン著『アメリカの大作家』より訳出)(一月、「南加熊野愛友会会報」七) ミレーの手紙より(二月、「三田評論」二八三)

《其の他》発刊の辞(史学)(十一月、「史学」一一一)

一九二二年(大正一一)

二九歳

十一月、深川青年団に於て「社会生活の意義」と題し講演。

この年、花田比露思主宰の短歌雑誌「あけび」に投稿をはじめ。 (五月号にはじめて掲載され、以後約一〇回

に及ぶ)

《著書》熊野民謡集(炉辺叢書)(二月、東京・郷土研究社刊。菊半截、一五〇頁)

《論文》ルネサンス概観(五月、「三田文学」三一五) 古代日本人の自然観(一〇月、「三田文学」一三一

一〇、「古代日本人の思想」所収)

《論評・資料》アンテューウスの話(五月二十八日稿、「会報」(商工学校誌)所載) 熊野の地と人(六月、「三

田評論」二九九、「熊野民俗記」所収) 八月号の自選歌評について(一〇月、「あけび」二一九) 社会

生活の意義(十一月二十二日稿、深川の講演要旨をまとめたもの、「会報」(商工学校誌)所載)

《書評》古代芸術に関する二書(一月、「三田評論」二九四) Lewis Spense; An Introduction to Mythology

(二月、「史学」一一二) 野依氏の宗教観(三月、「三田評論」二九六) 大川周明著日本文明史(五月、

「史学」一一三) 西村真次著安土桃山時代(八月、「史学」一一四) 柳田国男編郷土誌論(八月、「史学」

一一四) 川合貞一著現代哲学への途(十一月、「史学」二一一) 三浦周行著日本史の研究(十一月、「史

学」二一一) 小林澄兄訳世界教育思想史(十一月、「三田評論」三〇四)

《その他》松本実三小伝(九月、「松本実三遺稿」所収)

一九二三年(大正一二)

三〇歳

三月、慶応義塾商工学校教員を辞任。 四月、慶応義塾大学予科教員兼専門部(のちの高等部)教員に就任し、

国史、国語、ならびに西洋史を講ず。

《論文》ユダヤ人問題の根本的知識(七月、「三田評論」三一二)

《論評》田中先生の政治思想について(十一月、「三田評論」三二五)

《書評》中村直勝著日本文化史（南北朝時代）（三月、「史学」二一二） 占部百太郎著仏蘭西革命史論（五月、「史学」二一三） 川合貞一著哲学から教育へ（五月、「史学」二一三） 鈴木錠之助訳（クーランジユ）希臘羅馬史論（二月、「史学」二一四） 二月、「三田評論」三一六） 朝鮮総督府大正九年度古蹟調査報告第一冊（二月、「史学」二一四） 石川県史蹟名勝調査報告第一輯（二月、「史学」二一四） 《其の他》弔詞（田中萃一郎先生）（二月、「史学」二一四） 編輯余録（二月、「史学」二一四）

八月一三日、田中萃一郎急逝。占部百太郎、史学科主任となる。

### 一九二四年（大正一三）

三一歳

一九二二年頃より田中萃一郎を中心に、主として史学科教員の翻訳による『泰西名著歴史叢書』（全一四巻）計画され、その担当分、ギゾー欧州文明史を刊行す。

《翻訳》ギゾー欧州文明史（泰西名著歴史叢書）（九月、東京・国民図書株式会社刊。菊判、六一九頁）

《書評》西村真次著国民の日本史（飛鳥奈良時代）（六月、「史学」三一） 鈴木重光編相州内郷村話（一

一月、「史学」三一四） 松本信広訳（テーヌ）大革命前の仏国（二月、「史学」三一四）

《其の他》故鈴木錠之助氏の略歴（八月、「史学」三一）

### 一九二五年（大正一四）

三二歳

六、七月にかけて、当時の東京帝国大学教授黒板勝美博士と古典や国体論に関し、東京朝日新聞紙上に於て論争す。

〔松本「国体新論」の疑点〕・六月二一日号、黑板「松本氏に問ふ」・六月二八日号、松本「黑板博士の反問に答ふ」・七月五日号

八月、高等部より、恒松安夫と共に、朝鮮、満州視察旅行にでる。釜山、慶州、京城、平壤、樂浪の遺跡、奉天、遼陽、旅順、大連などを経て、同月帰京す。

〔書評〕西村真次著文化人類学（二月、「史学」四一） 高木寿一著英国経済組織（二月、「史学」四一）

松本信広訳大革命前の仏国（三月、「三田評論」三三一） 金田一京助著アイヌの研究（五月、「史学」四一）

一）早川孝太郎編能美郡民謡集（五月、「史学」四一） 柳田国男編郷土会記録（五月、「史学」四一）

二）柳田国男著海南小記（七月、「三田評論」三三五） Shinji Nishimura; The Ashi-Bune or The

Reed-Cane（八月、「史学」四一） 寺石正路編土佐風俗と伝説（八月、「史学」四一） 東恩納寛

惇著琉球人名考（八月、「史学」四一） 佐喜真興美著シマの話（八月、「史学」四一） 沢木四方吉

著レオナルド・ダ・ヴィンチ（十一月、「三田評論」三三九） 恒松安夫著米国近世政治経済史（十一月、

「三田評論」三三九） 関根正直著服制の研究（十二月、「史学」四一） 垣田・坪井編口丹波口碑集

（十二月、「史学」四一）

〔その他〕序文（一月、田島周次郎著『我が郷土』）

一九二六年（大正一五）

三三歳

三月、慶応義塾高等部教員を辞任。 四月、慶応義塾商業学校教員を兼任。

〔論文〕人類学上より観たる人種優劣論（一〇、十一月、「三田評論」三五〇、三五二）

〔論評・資料〕鮮満雑感（三月、「三田評論」三四三） サエラ船（五月、「民族」一一四、『熊野民俗記』所

- 収) 二つ目だたらの伝説(六月、「伝説」一一二)  
 (書評) 自然と人生の關係(三月八日、「報知新聞」) 梅原末治著鑑鏡の研究(三月、「史学」五一二)  
 本山桂川著輿那国島図誌(同) 早川孝太郎著羽後飛島図誌(同) 啓明会第一五回講演集(同) 雑  
 誌民族(同) 石井誠訳ブルック英文学史(同) 島峯 徹  
金森虎男共著純粹生体「アイヌ人」の口腔器関特に歯牙  
 の研究(五月、「史学」五一二) 藤田亮作小泉頭夫・朝鮮古美術写真集(七月、「史学」五一三) 栗田  
 元次著綜合日本史概説(上)(同) 佐々木喜善著紫波郡昔話(同) 中道等著津輕旧事談(同) 沢木  
 四方吉著美術の都(同) 西村真次著文化移動論(同) 八月二三日「東京朝日新聞」 佐喜真興美著「女  
 人政治考」を読む(九月、「民族」一一六) 西村真次著體質人類学(十一月、「史学」五一四) 啓明会  
 第一八回講演集(同) 島根県史(同)

## 一九二七年(昭和二)

三四歳

- 三月、慶応義塾商業学校教員を辞任。 四月、慶応義塾大学文学部講師を兼任し、以後、日本古代史を講ず。  
 (著書) 日本史要(四月、慶応義塾出版局刊。 菊判、一二三頁)  
 (論文) 古事記の撰録について(九月、「史学」六一三)  
 (論評・資料) 俗信(七月、「民族」二一五、「熊野民俗記」所収) 女郎蜘蛛の話(八月、「三田文学」三  
 一八、「熊野民俗記」所収) 熊野の蜻蛉釣り(十一月、「民族」三一、「熊野民俗記」所収)  
 (書評) 横山由清著日本田制史(三月、「史学」六一二) 伊波普猷著琉球古今記(同) 柳田国男著山の  
 人生(同) 小山真夫編小県郡民謡集(五月、「史学」六一二) 雑賀貞次郎編牟婁郡口碑集(十二月、  
 「史学」六一四) 佐々木喜善著老媪夜譚(同)

一九二八年(昭和三) 三五歳

七月、郷里下里町に帰り、二八、二九、三〇の三日間、郡及び区教育会主催の講習会に於て「古代史について」を講ず。

九月、慶応義塾大学より留学生として独、英、仏に留学。この年はベルリンに滞在。

《論評》 武士道 (二月、「成人」三一七)

《書評》 栗田寛纂訂古風土記逸文 (三月、「史学」七一) 西村真次著神話学概論 (同) 西村真次著

『万葉集の文化史的研究』をよむ (五月一二日、「時事新報」) 松岡静雄著民族学より見たる東歌と防人歌

(七月、「史学」七一) 笠松彬雄編紀州有田民俗誌 (同)

《其の他》 雑感 (二月、「南加熊野愛友会会報」五)

一九二九年(昭和四) 三六歳

春、ベルリンより、スイス、イタリア、フランスを旅行し、ベルリンに帰る。夏、ベルリンを離れ、スウェーデン、デンマーク、オランダを経てイギリスに渡り、ロンドンに滞在。その間、スコットランドを旅す。

《論評》 独逸風物いろいろ―伯林だより (九月三〇日、「三田新聞」)

一九三〇年(昭和五) 三七歳

春、ロンドンを出てベルギー、フランス、スペインを経てフランスに帰り、次いでドイツ国内を旅行し、さらにオーストリア、ハンガリー、チェッコスロヴァキアを経てドイツにもどり、再びロンドンに入る。秋、ロン

ドンよりアメリカに渡り、カナダを経て、一二月帰朝。

一九三二年(昭和六)

三八歳

一月、慶応義塾大学文学部助教兼大学予科教員に就任。

《論文》古事記論の一節(一二月、『川合教授還暦記念論文集』所収)

《論評》人種問題雜観(三月三十一日、『三田新聞』) 巨石文化と洞窟文化(九月、『史学』一〇―三) 石

斧と雷(同)

《書評》占部百太郎著聖地紀行(六月、『史学』一〇―三) 雑誌「郷土研究」の再刊(同) 栗田寛纂註

標註古風土記、出雲(同) 伴信友著高橋氏文考註(九月、『史学』一〇―三) 野村八良著上代文学に

現れた日本精神(一二月、『史学』一〇―四) 伴信友著鎮魂伝(同)

一九三三年(昭和七)

三九歳

《論文》日本神話の地理的考察(一〇月、『史学』一一―三)

《書評》松本信広著日本神話の研究(一月一日、『三田新聞』) 三月、『史学』一一―二) 西村真次著世界

古代文化史(二月一七日、『時事新報』) 大西貞治著古代日本精神文化の研究(二月二〇日、『三田新聞』)

豊田八千代著万葉地理考(三月、『史学』一一―一) 内田周平述寛政三博士の学勲(同) 竹内理三著

奈良時代に於ける寺院経済の研究(七月、『史学』一一―二)

一九三三年(昭和八)

四〇歳

一月、慶応義塾大学文学部教授に任ぜらる。

《論文》 神話学よりみたる日本古代史(四月、「歴史教育」八一—)

《論評・資料》 史学の溟濛(十一月、「史学」一一—四) 史学理論文献目録(有賀春雄共編)(同) 文

書の虚(同) 熊野下里の童戯(五月、「民族学」五—五、「熊野民俗記」所収)

《書評》 橋本増吉著耶馬台国論考(三月二十九日、「時事新報」) 大倉桑馬 松岡静雄共著伊予上代史考・伊曾乃神社(四

月、「史学」一一—二) 佐藤小吉著系譜精表(同) 間崎万里訳古代文化史(六月、「三田評論」四三〇—)

後藤守一著上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳(八月、「史学」一二—三)

一九三四年(昭和九)

四一歳

《論文》 歴史家としての福沢諭吉先生(二月、「史学」一三一—三)

《論評・資料》 熊野下里の古墳(二月、「ドルメン」三一—二、「熊野民俗記」所収)

《書評》 岩波講座日本歴史(二月一六日、三田新聞) 西村真次著日本民族理想(八月一三日、時事新報)

一九三五年(昭和一〇)

四二歳

《論文》 古代に於ける夫妻別居制(四月、「史学」一四—二)

一九三六年(昭和一一)

四三歳

《論文》 古代人と犬(二〇月、「歴史教育」一一—七)

〔書評〕 益本重雄 藤沢音吉 共著内村鑑三伝 (五月、「史学」一五一—二)

〔其の他〕 感想 (六月、「慶応義塾基督教青年会ニュース」)

#### 一九三七年(昭和一二) 四四歳

四月、津田塾専門学校講師として、日本文化史を講ず。

〔論文〕 古代社会に於ける母性 (二月、「史学」一五一—四)

〔論評〕 イギリスに於ける巨石文化の遺跡 (五月二十五日、「三田新聞」)

〔書評〕 杉田雨人著木村謙次 (十一月、「史学」一六一—三)

〔其の他〕 新しく学部へ進む人達へ (三月三十一日、「三田新聞」)

#### 一九三八年(昭和二三) 四五歳

四月、慶応義塾大学評議会委員を兼ねる。

六月、日本諸学振興委員会主催歴史学会に於て、「我が上代人の国土観念」を発表。

一二月、学術調査のため、柴田常恵、間崎万里、松本信広と共に中支旅行に出る。一二月三〇日出発し、主として南京、杭州の遺跡を調査して、翌年一月末帰国。

〔論文〕 我が上代人の国土観念 (一二月、「日本諸学振興委員会研究報告」四。学位論文「古代日本人の政治思想」一九五〇年の母胎をなす)

〔書評〕 綜合古瓦研究 (『夢殿論誌』一八) (一二月、「史学」一六一—三)

一九三九年(昭和一四) 四六歳

《論文》 戦記物語にあらはれた中世武士と戦争(二月、「史学」一八―二・三、『日本文化史』所収)

《論評》 中支遊記(九月、「史学」一八一―二)

《書評》 肥後和男著古代伝承研究(四月、「史学」一七一―三)

一九四〇年(昭和一五) 四七歳

三月、慶応義塾大学評議会委員を辞任。

《論文》 古代に於ける一夫多妻制について(四月、「史学」一八一―四) 御東征物語の史的意義(八月、「史学」一九―二)

一九四一年(昭和一六) 四八歳

《論文》 古代日本人の歴史思想(三月、『歴史理論の構成』所収、のち『古代日本人の思想』に再収)

《書評》 志波彦神社  
塩竈神社編古事記諸本解題(七月、「史学」二〇―二)

一九四二年(昭和一七) 四九歳

《著書》 日本文化史要(四月、慶応義塾出版局刊。菊判、一二二頁)

《論文》 古代人の海洋意識(三月、「史学」二〇―三、『古代日本人の思想』所収)

一九四三年(昭和一八) 五〇歳

四月一日、慶応義塾大学予科教員（兼任）を辞任。

一二月一二日より松本信広と共に九州旅行に出る。中津、白杵、深田石仏、宮地、高森、高千穂、延岡、西都原、宮崎、青島、鶴戸、霧島、隼人、指宿、鹿児島、熊本、久留米、鳥栖、長崎、博多、太宰府などを経て、翌年一月八日帰京。（『筑紫の旅』、「史学」三三二—三）

〔著書〕日本民族の文化（民族叢書一）（六月、東京・六盟館刊。菊判、二六七頁） 熊野民俗記（一二月、東京・三教書院刊。四六判、三二八頁）

〔論文〕古代蝦夷論（六月、「史学」二二—三・四、『日本の民族』所収）

〔論評・資料〕熊野下里の獅子舞（七月、「芸能」九—七、『熊野民俗記』所収） 総力戦に於ける芸能体制  
確立と学者の責任（八月、「芸能」九—八）

〔書評〕永橋卓介訳フレーザー金枝篇（九月、「史学」二二—二）

#### 一九四四年（昭和一九） 五一歳

三月、津田塾専門学校講師を辞任。 一二月、慶応義塾大学語学研究所員を兼任。

〔論文〕古代の戦争と女性（二月、「歴史と生活」七一—二） 古代人の戦争観念（七月、「史学」二二—二・三、『古代日本人の思想』所収） 熊襲・隼人論（一二月、「史学」二二—四、『日本の民族』所収）

三、『古代日本人の思想』所収） 熊襲・隼人論（一二月、「史学」二二—四、『日本の民族』所収）

#### 一九四五年（昭和二〇） 五二歳

三月、日本諸学振興委員会歴史部専門委員を委嘱さる。

一九四六年(昭和二一) 五三歳

四月、慶応義塾協議会委員に任ぜらる。六月、慶応義塾大学語学研究所員(兼任)を辞任。

一九四七年(昭和二二) 五四歳

五月二六日、慶応義塾創立九十周年記念学術講演会に於て「革新と伝統」と題し講演。(『日本文化史』一九五五年刊に要旨を収む)

一九四八年(昭和二三) 五五歳

五月、慶応義塾大学通信教育部―創設は一九四七年二月―の第二代部長を兼任し、創草期の通信教育事業の充実を計る。

同月、関西に於ける通信教育事業の啓蒙発展のため、大阪市に於て開校記念講演会を開催のため出張。一月、同趣旨のため福岡市に於て、学術講演会を開催のため出張。

《著書》日本の民族(一)(二)、二月、慶大通信教育教材。各、A5判・五四頁)

《論文》日本神話の文化史的意義(二月、一月、「史学」二二―三)

《論評》独学について(七月、「三色旗」四) 東京設計図(二〇月、「三色旗」七)

《その他》新入学生諸君へ(八月、三色旗特別号) スクーリングを終えて(九月、「慶応通信」六) 第二期生を迎う(二〇月、「慶応通信」七) 第

一九四九年(昭和二四) 五六歳

三月、通信教育部主催により、名古屋市に於て講演（「伝統としての日本文化」、「日本文化史」に要旨を収む）  
 四月、同じく高崎市に於て講演。五月、同じく新潟市に於て講演。六月、同じく仙台市、札幌市に於て講演。  
 演。（「外来文化の摂取について」、「日本文化史」所収）九月、同じく大阪市に於て講演。十一月、同じく広島市、福岡市、大分市、熊本市に於て講演。（熊本、「国史にあらはれた筑紫」、「日本文化史」に要旨を収む）  
 （著書）日本文化史（一）（三月、慶大通信教育教材。A5判・六四頁） 日本文化史（二）（七月、同。A5判・六四頁）

（論文）国史における変革とその主動者（一〇月、「史学」二四―一、「日本文化史」所収）  
 （論評）伝統としての日本文化（五月、「三色旗」一四） 読書について（九月、「三色旗」一八）  
 （其の他）日本民族・研究の手引（六月、慶大通信教育教材） 緑の芽（一〇月、広島慶応会） 科目別  
 履習制の新設（一〇月、三色旗特別号） 希望（十一月、「希望」二二） 中国・九州の旅を終えて（十一月、  
 「慶応通信」二〇） 学生諸君に告げる（一二月、通信教育教材の葉）

一九五〇年（昭和二五）

五七歳

四月、通信教育部主催により、静岡市、名古屋市、大阪市に於て講演（名古屋、「史学について」）五月、同じく、松江市、呉市、岡山市に於て講演。一〇月、同じく、姫路市、高松市、徳島市、松山市、高知市に於て講演。

一二月、慶応義塾大学文学部に提出の学位論文「古代日本人の政治思想」（『古代日本人の思想』一九五九年刊）に所収）により、文学博士の学位を受ける。

（論評）塾風について（一月、「三色旗」二二）

〔其の他〕所感（二月、「湘南三田クラスだより」三・四） 第四期生を迎う（三月、「慶応通信」二四）  
感想（五月、「駿河慶友」六） 挨拶（五月、「鳥取慶応会会誌」六） 働きつつ学ぶ道（一二月、慶大通信教育案内）

一九五一年（昭和二六）

五八歳

二月、大学設置審議会臨時委員（文部省）を委嘱さる。同月、慶応義塾協議会の解散により委員を辞任。四月、慶応義塾大学大学院（文学研究科）の授業をも担当。

三、四月、通信教育部主催により、福山市、鳥取市、京都市に於て講演。（福山、「国史に於ける変革について」、鳥取、「国史に於ける伝統と革新」）五月、同じく、金沢市、富山市、福井市に於て講演。同月、更に浜松市に於て講演。六月、慶応義塾史編纂所委員を兼任。同月、通信教育部主催により、福島市、新庄市、秋田市に於て講演（「歴史の見方」）一〇月、同じく、仙台市、盛岡市に於て講演（仙台、「福沢先生の歴史観」、盛岡、「独立について」）十一月、同じく、和歌山市、田辺市、宇治山田市に於て講演。

〔著書〕国史（六月、慶大通信教育教材。A5判・七六頁）

〔論文〕外来文化の摂取について（一月、「三色旗」三四、『日本文化史』所収） 古代人の他界観念（一〇月、『日本民俗学のために』一〇・所収、『古代日本人の思想』に再収）

〔論評・随筆〕南国天楼放談（三月、「下里町新聞」一〇） 歴史の学習について（四月、「三色旗」三七）  
閑日月（七月、「丘の上」三一一） 独立の精神について（九月、「慶応通信」四二） 随想（一〇月、「枋の芽」一）

〔其の他〕所感（一月、丘の友創刊号） 国史・研究の手引（七月、慶大通信教育教材）

一九五二年(昭和二七)

五九歳

四月、通信教育部主催により、甲府市に於て講演。(「独立について」 六月、同じく、福岡市、鹿児島市、延岡市に於て講演。 十一月、同じく、豊橋市、岐阜市、奈良市に於て講演。

《著書》史籍解題(二月、慶大通信教育教材。A5判・六五頁)

《論文》土蜘蛛論(九月、「史学」二五―四、『日本の民族』所収)

《論評》わが国の独立について(三月、「三色旗」四八、『日本文化史』所収) 子はかすがい―韓子について―(八月、「三色旗」五三)

《(その他)》新年に当って(二月、「慶応通信」四六) 史籍解題・研究の手引(三月、慶大通信教育教材)

通信教育課程の卒業生を送る(三月、五二年三田会) 卒業生を送ることは(四月、「慶応通信」四九)

先達としての責務(同) 面接授業に想う(七月、「慶応通信」五二) 今宮新氏提出学位請求論文審査要

旨(九月、「史学」二五―四) 第二回卒業生を送ることは(十一月、「慶応通信」五六)

一九五三年(昭和二八)

六〇歳

四月、杉野学園女子短期大学講師を兼ね、日本文化史を講ず。

九月、慶応義塾大学通信教育部長を辞任。

一〇月、慶応義塾大学文学部長並びに大学院文学研究科委員長を兼任。

《論評・随筆》常に最善をつくせ(四月、「慶応通信」六一) 独立の精神について(四月、「三色旗」六一)

少年時代の思い出(九月、下里公民館) 勝負について(一〇月、「三色旗」六七)

《其の他》 スクーリングに出席する人に（七月、「慶応通信」六四） 学力考査の世界史について（八月、「三色旗」六五） 部長としての六年間（十一月、「慶応通信」六八） 学生諸君へのことば（同）

一九五四年（昭和二九）

六一歳

三月、杉野学園女子短期大学講師を辞任。

《著書》 日本の民族（九月、慶応通信刊。A5判・二六八頁）

《論評・随筆》 紀州を語る（二月、「三色旗」七一）

《其の他》 三田に迎う（二月、文学部ガイドブック） 通信教育最終試験問題批評（七月、最終試験問題集（三））

一九五五年（昭和三〇）

六二歳

一〇月、慶応義塾大学文学部長並びに大学院文学研究科委員長を重任。

《著書》 日本文化史（八月、慶応通信刊。A5判・二九八頁）

《論文》 古代に於ける近親婚について（四月、「史学」二八一―二）

《論評》 私の愛読書（一月、「三色旗」八二） 折口さんと地人会（三月、『折口信夫全集』・月報六） 史学科今昔談（三月、『三田にひらめく三色旗』所収） 神仙の国（八月、「三田評論」五六六） 警官（九月二十七日、「毎日新聞」夕刊）

《其の他》 多岐に渉る試問（二月、「慶応義塾大学新聞」受験特集号） 卒業生を送る辞（三月、昭和三〇年度三田会誌） いわゆる舌禍事件について（六月、「慶応義塾大学新聞」一四五） いわゆる舌禍事件

について(七月、「三色旗」八八)

一九五六年(昭和三一)

六三歳

《論評・随筆》もし私がフルシチョフであったなら(一月、「慶応通信」九四)

新春随想・みかん(一月、

「慶応義塾大学新聞」一六三)

よき日の学生時代(二月二三日、「毎日新聞」

個人崇拜(七月、「三色旗」

一〇〇)

コンパ・餅・大食(八月、「蛍雪時代」二六一五)

《その他》送別のことば(三月、三田会誌)

通信教育科目試験の手引(日本文化史)

(同新版第二集所収、

六月、慶応通信)

一九五七年(昭和三二)

六四歳

六月、港区より、港区史編纂委員を委嘱され、その編纂監修に当る。

九月、慶応義塾大学文学部長並びに大

学院文学研究科委員長を辞任。

一〇月、通信教育部主催により、大館市、秋田市に於て講演。

《論評・随筆》小さな足跡

(五月、「慶応義塾大学新聞」一九四)

古典と熊野(六月、「大和文華」二三)

複雑多彩(七月、「三色旗」一一二)

慶応義塾(一一月、河出版『日本歴史大辞典』七、所収)

《その他》送別のことば(三月、一九五七年三田会)

港区史略年表(監修)(一二月、港区史編纂室)

一九五八年(昭和三三)

六五歳

四月、通信教育部主催により、広島市に於て講演。

《論文》白石の史学について（二月、「史学」三二一—四）  
《論評・随筆》シャーロック・ホームズについて（二〇月、「新文明」八一—一〇〇）

一九五九年（昭和三四）

六六歳

三月、大学基準等研究協議会文学部会委員（文部省）を委嘱さる。四月、三田史学会会長を兼任。七月、通信教育部主催により、札幌市、釧路市に於て講演。

十一月、『古代日本人の思想』により、昭和三四年度慶応義塾学事振興資金による義塾賞を授与さる。

《著書》古代日本人の思想（八月、東京・寧楽書房刊。A5判・三二〇頁）

《論文》時代と個人（八月、「三色旗」一三八） 福沢史学について（二〇月、『福沢論吉全集』六・附録月報）

《論評・随筆》筑紫の旅（四月、「史学」三三二—二） 飼ってみたい（五月、「新文明」九—五） 古本整理（二一月、「新文明」九—二）

一九六〇年（昭和三五）

六七歳

三月、大学基準等研究協議会文学部会委員を辞任。六月、その監修にかかる『港区史』（略年表とも全三巻）刊行され、編纂監修の任をとかる。一二月、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫長を兼任。

《論評・随筆》思い出（二月、『郁文館学園七十年史』所収） 新居（五月、「新文明」一〇—五） あれ

から十五年（二〇月、「新文明」一〇—一〇〇）

《その他》港区史（上、下）（監修）（三月、港区史編纂室） 清水潤三氏提出学位請求論文審査要旨（二二月、「史学」三三一—二）

一九六一年(昭和三六)

六八歳

二月、大学設置審議会臨時委員を辞任。一〇月、通信教育部主催により、長崎市、佐世保市に於て講演。

《論文》中世文学と熊野(三月、「史学」三三—二)

《論評》文化の交流(十一月、「三色旗」一六四)

《その他》はしがき(史学科開設五十周年記念)(四月、「史学」三三—三・四) 雑草をぬく(一〇月、

「新文明」一一—一〇)

一〇月二一日、史学科開設五十周年を祝い、三田史学会は赤坂のホテル・ニュージャパンに於て、祝賀会を開催。

一九六二年(昭和三七)

六九歳

《論評・資料》崇高な精神に生きる—新憲法を祝う(五月五日、「慶応義塾大学新聞」) 見るということ

(七月、「新文明」一一—七) 津田左右吉博士をしのぶ(十一月、「新文明」一一—一二) 柳田先生と

地人会(一〇月、「定本柳田国男集」・月報一〇)

《その他》創刊の辞(二月、「斯道文庫論集」) 国史・学習の手引(八月、慶応通信) 序文(十二月、「江戸

時代書林出版書籍目録集成」一・斯道文庫刊) 序文(間崎万里先生頌寿記念)(同、「史学」三五—二・三)

一九六三年(昭和三八)

七〇歳

一〇月二五日、慶応義塾大学の同僚門弟たち、古稀を祝し、産経会館に於て記念祝賀会を開催。三田史学会は

「史学」の第三六卷、第二・三号を「松本芳夫先生古稀記念」号として刊行し、献呈す。

〔論文〕山片幡桃の歴史観（三月、「斯道文庫論集」二）

〔論評・随筆〕万福会（二〇月、「新文明」一三一—一〇） 無学の嘆（二〇月、「三色旗」一八七）

一九六四年（昭和三九） 七一歳

三月、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫員一同、「斯道文庫論集」三輯を記念号として献呈す。

〔論評・随筆〕思い出（二月、「三田評論」六二—二） 私の楽しみ—花づくり—（二月、「慶応通信」一九〇）

（一九六四・三・一〇稿）

〔附〕記事については直接先生よりうかがったものが多く、その選択については先生の御意向にそいつつ編者の責任に於てなした。その際資料に関しては塾史編纂所、通信教育部の協力を得た。著作目録に就いては「松本芳夫先生略歴・著作目録」（「史学」三六—二・三）を参考にし、これを内容別に分類し、かつ若干の補訂を加えた。尚、記事、著作類の遺漏の点、お気づきの節は御教示を賜りたく、お願い申上げる。

太田次男